平成２９年度　全国学力・学習状況調査

調査日　：平成２９年４月１８日（火）
対象学年：第６学年
調査内容：教科に関する調査

国語Ａ・算数Ａ　　「主として『知識』に関する問題」

> 身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能などに関わる内容

国語Ｂ・算数Ｂ　　「主として『活用』に関する問題」

> 知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力などに関わる内容

●「教科に関する調査」の概要

◇　教科別平均正答率（%）

	国語Ａ	国語Ｂ	算数Ａ	算数Ｂ
第七葛西小	８０	６４	８４	５３
東京都	７６	６０	８１	４９
全国	７４，８	５７，５	７８，６	４５，９

●　教科別結果分析と今後の課題

国語Ａ 学校平均８０．０％ 都平均７６．０％ 全国平均７４．８％	国語Ａの問題における本校児童の平均正答率は８０％で、全国平均は５．２％、都の平均は４％上回っている。 観点別にみると、「書く能力」が最も高く５％、「言語についての知識・理解・技能」が３．９％、「話す・聞く能力」が２．６％、都の平均を上回っている。一方で「読む能力」については０．３％と若干上回るにとどまった。 出題別に見ると、「俳句の情景や表現の特徴を捉えて読む設問」、「古文における言葉の響きやリズムを楽しみながら読む設問」の正答率が都の平均に比べ、低い傾向が見られる。 「俳句に描かれている情景を的確に捉える」能力を高めるためには、季節感や俳句に込められた思いを想像すること、七音五音を中心としたリズムから俳句の響きを感じ取り、音読したり暗唱したりする活動を通し、文語の調子に親しむことができるよう指導することが大切である。また俳句に表れている情景や作者の思いなどについて感じたことを交流し、想像したことを広げたり深めたりすることが必要である。 また、「音読することで、古文の楽しさを実感できる」能力を育てるためには、文章の解釈に重点を置くのではなく、できるだけ多くの文章に触れていく中で、自然と興味・関心をもつことができるよう指導することが大切である。古文の楽しさを実感できるように、音読や暗唱を低学年の段階から計画的、継続的に指導することが必要である。

国語B 学校平均 64.0% 都平均 60.0% 全国平均 57.5%	国語 B の問題における本校児童の平均正答率は、６４％で全国平均を６．５％、都の平均を４％上回っている。 観点別にみると、「国語への関心・意欲・態度」「話す・聞く能力」「書く能力」については、２．６～７％上回っているのに対し、「読む能力」は、０．５％上回るにとどまっている。特に「物語を読み、具体的な叙述を基に理由を明確にして、自分の考えをまとめる設問」の正答率が低く、都の平均が４４．８％に対し、学校平均は、３３．３％と大きく下回っており、２７．４％の児童が無解答であった。 叙述を基に理由を明確にして、自分の考えをまとめる際、その叙述を見付けるために場面の展開に沿って、登場人物の言動や心情の変化を捉えて読むことが必要となる。また、１つの場面の叙述だけを対象とするだけでなく、複数の場面の叙述を相互に関係付けながら読むことが大切である。全文を通した読みや全体を見通すことができるような学習シートを用いたり、感想を記入したカードやノートを活用したりしながら、どの叙述に着目したかを明確にすることができるよう指導することが考えられる。また「叙述を基にしてどう考えたのか」を交流することで自分の考えを深めていく。
算数A 学校平均 84.0% 都平均 81.0% 全国平均 78.6%	算数Ａの問題における本校児童の平均正答率は、８４．０％で全国平均を５．４％、都平均を３．０％上回っている。また、領域別でも、４領域それぞれで、１～４％都の平均を上回った。 設問ごとにみると、「正多面形の性質を理解する問題」「資料から、二次元素の合計欄に入る数を求める問題」「重さ・長さについて任意単位による測定について理解する問題」の正答率が高かった。一方で、「加法と乗法の混合した整数と小数の計算する問題」「立方体の面と面の位置関係を理解する問題」では、都の平均を下回っているため、重点的に指導に取り組んでいくべき内容である。 そのためには、計算の順序についてのきまりを確実に理解できるようにしたり、具体物を用いた立体図形の構成活動を通して、立体図形の面と面の位置関係について理解できるようにしたり、視覚的に捉え考えさせる指導を進めていく。 また、基礎的な計算力を高めるために、少人数指導の指導法を工夫し、個に応じた支援を行うことで、児童の能力を更に高めていく。
算数B 学校平均 53.0% 都平均 49.0% 全国平均 45.9%	算数Ｂの問題における本校児童の平均正答率は、５３．０％で全国平均を７．１％、都の平均を４％上回っている。観点別にみると、「数学的な考え方」は４．１％、「数量や図形についての知識・理解」は、４．８％都の平均を上回り、全般的に全国・都の平均を上回った。 設問ごとにみると、「料金の差を求めるために示された資料から必要な数値を選び、その求め方と答えを記述する問題」や「示された式の中の数の意味を、表と関連付けながら正しく解釈し、それを記述する問題」では、正答率が都平均よりも７％以上高く、よくできていた。一方で、「示された考えを解釈し、数を変更した場合も同じ関係が成り立つことを、図で表現する問題」では、正答率が全国平均を下回り、無回答率も倍以上あった。また、「問題に示された二つの数量の関係を一般化して捉え、そのきまりを記述する問題」では正答率は都平均とあまり変わらないが、無回答率が２５％と高く、４分の１の児童が無回答であった。このことから、算数の問題場面から児童自らが数量の関係を見出し、きまりを見つける楽しさを実感できる指導や見出した数量関係を一般化して捉え、そのきまりを言葉と数を用いて自ら説明する学習を充実させていくことが必要である。